



# 碧の風

千葉市立川戸中学校  
校報 第12号  
(最終号)  
令和5年3月24日

## 旅

校長 板垣 章子

「心の旅」、「いい日旅立ち」、「たびの空から」—————

このようなフレーズを挙げると年齢がばれてしまいますが、私には「旅」という言葉への憧憬があります。自分が中学生だった頃、最も身近な大人である先生方が、時おり、旅の話をしてくださいました。「ほんの少し時間とお金があったから、新潟の十日町の雪まつりに一人で行ってきたよ」とか、「夏休みに、長野のお寺で修行をしてきたよ」とか、先生たちは授業中にもかかわらず話してくださいました。私たち生徒も未知の世界に思いを馳せ、先生たちの旅の話を夢中になって聞きました。担任の先生などは、長期休みにソ連（現ロシア）まで行き、お土産のロシア帽子を得意げにかぶって出勤していました。

北原白秋の詩「落葉松（からまつ）」を知ったのも中学生の頃でした。当時は班内で毎日好きなことを書き合う「班ノート」というものがありました。友達がそこに「これ、好きなんだ」と言って、詩の全文をオリジナルのイラスト入りで書いていました。「からまつはさびしかりけり。たびゆくはさびしかりけり。」という小節がなぜか心に染み入り、「私も好きかも」と言葉にならない感傷に浸っていたことを覚えています。

「旅」への憧れは、自由への憧れなのかもしれません。まだ見ぬ世界への好奇心と可能性への挑戦、わくわくするような未来を象徴するものが「旅」だったのでしょう。しかし一方では、何かとの決別、という側面もあります。これまでの日々に別れを告げ、引き戻すことはできないという強い覚悟で一步を踏み出すことが必要です。自分と向き合い、自分を深く見つめ、自分に責任を負うということ、まさに「旅」は「自立」への道であり、大人になっていくことそのものなのかもしれません。

本校では、3月10日に3年生が卒業しました。無邪気な表情で入学してきた頃を忘れてしまうほど大人びた顔つきになり、しっかりとした足取りで学校から巣立っていきました。2年生、1年生もまた、着実に旅立ちの時に向けて成長しています。

さて、本日をもって令和4年度の教育課程を修了します。本校職員は「チーム川戸」として教育活動に真摯に向き合い、精一杯尽力してまいりました。力不足の点や不行き届きの点も多々あり、ご心配をおかけすることもあると思います。そのような点についてお詫び申し上げますとともに、地域や保護者の皆様の温かいご支援やご協力に、心より感謝申し上げます。

ありがとうございました。



春を告げる正門わきの紅梅

